

「授業備品」N092 1.1.10.2 「どこから手を付けたら II」

全国学力・学習状況調査の報告を各地よりいただいた。成果の出た学校の共通点は、「子供が授業を創っている」ことであった。また、これまでの学校・教師にありがちな「個人芸」の教科指導が消え、教科を越えた「学び方指導」を行っている学校に成果が出ていた。

家にも土台があり、その上に建物が建っている。授業でいえば、その土台こそが「学び方」であり、そのことを教科横断的に進めていかなければならない。教科が違うので校内研修が成り立たない、教科が違うので意見を言い難い等は過去のことにしなければならない。再度、授業を変える事の提言を行いたい。

1 アウトプット（ブツブツタイム）

教師がしゃべるのではなく、子供が授業の中でアウトプットが出来るかどうかだ。これまでの教科書の内容を教師が解説したり、子供に指示を出していたら子供たちは、何も話さなくなる。子供には受け身型の授業が延々と続くからだ。

アクティブ・ラーニングは、子供たち自身で授業を積極的に創っていく学びだ。そのための方策が子供によるアウトプットだ。全員が話す、すなわち「ブツブツタイム」が有効であることをご紹介してきた。「前時の復習」「資料を見てのペア学習」「まとめ」「振り返り」等、代表の子供だけが話すのではなく、全子供が話すアウトプットを取り入れるとよい。子供は他人事ではなく自分事として授業を受け止めると思う。子供全員が主役なのだ。

2 キーワード（教科用語）

子供は、授業の場で新しく学ぶキーワードや、その言葉を何回も使うことで学習内容を習得することが出来る。このキーワードは全教科で使うことが重要である。キーワードを使って見通しを立てる、キーワードを使って自力解決をする、キーワードを使って考察やまとめを行う等、授業では重要な位置づけとなる。

キーワードは、子供にとっては「ヒントカード」にもなる。また、教師による教え込みを防ぐためにも必要である。キーワードは3回旅をする（①キーワードが見通しの場面に行く ②見通しの場面から考察の場面に動く ③考察からまとめに動く）等はお伝えしてきた。

3 板書の統一

アクティブ・ラーニングの行き着くところは、「教科横断的な学び」だ。その学びを支えるためには、学習指導要領の総則が指摘する「課題」「見通し」「振り返り」「まとめ」等の場面がよく分かるための「グッズ」を黒板に貼ることが重要である。

授業者だけでなく子供たちに、「今は問題解決的な場面のどこか」が分かるようにしなければならないからだ。授業者だけ分かっている、他教科の問題解決的な学習はどうなっているかが分らないでは、子供たちの主体的な学びとはならない。そこで教科を超え、板書の書き方を統一するとよい。子供たちは教科や授業者が違っても、同じような板書があればノートをしっかり記述することが出来る。そのことが授業理解につながる。

教師による個人芸的な板書では、子供が教師に合わせなければならない。逆である。教師が教科を超え、書き方を合せるようにすることが大事だ。

4 「問いかけと多答」

子供に発問をすれば、それなりの返答が返ってくる。だが、どうしても分かる子の返答となる。アクティブ・ラーニングの良さは、仲間と気軽に話し動きが授業の中にあることだ。これまで多くの授業を観て、教師が発問をすれば「子供が身構える姿」を見てきた。発問・挙手・発表の連続が当然のように行われ授業が進行していく授業である。さて、C層の子供はどうすればいいのだろう。

その改善方法が、発問から「それはどうしてなのか」と問いかけ、子供たちが仲間と相談をしてつぶやく（多答）ことを追い求めたらどうだろうか。教師対子供の一問一答を避けることが出来る。教師の発問に子供が身構え2～3人の子供が発表をする、すごい意見を言う子供がいる授業ではなく、全員の子供たちが何気なくつぶやき、「言えた」と言う満足感を持たせる授業にしてはどうだろうか。

新学習指導要領の理念を大事にする授業が目前に迫っている。校内で話し合い準備を喫緊にする時期である。